

# 第6回 銀華文学賞発表

## 銀華文学賞

銀華文学賞もおかげさまで六回を重ねることができました。今回もまた日本全国および海外から、五二六篇の作品が寄せられました。昨年の四四九篇をはるかに超える御応募をいただきましたことを、心から御礼申し上げます。

多数の応募作の中から、選考委員／大高雅博・八覚正大・小沢美智恵・小浜清志・五十嵐勉による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。優秀な作品、力作、佳作も多く、たいへん充実した選考となりました。

また本年も故河林満を偲んで、御遺族の御厚意により河林満賞を選出させていただきました。

なお、誌面の都合により、奨励賞などの作品は三四号以降に順次掲載させていただく予定です。御期待ください。

第六回銀華文学賞授賞式・祝賀会および懇親会は、二〇一〇年一月三十一日（日曜日）午後二時より東京の大田区民プラザにて「文芸思潮」エッセイ賞・現代詩賞授賞式などといっしょに行なう予定です。どなたでも御参加可能ですので、どうぞお誘いの上御来場ください。

第七回銀華文学賞も昨年とほぼ同じ要領で行ないます。皆様の御応募を心からお待ちしております。

### 当選

#### 「線路は続く」

楡木啓子（北海道札幌市）

#### 「光のケーン」

藤原恵一（埼玉県さいたま市）

#### 河林満賞

#### 「白い哀しみ」

前岡光明（東京都町田市）

### 優秀賞

#### 「幻臭」

室町 眞（東京都杉並区）

#### 「道標」

井上梨白（神奈川県横浜市）

#### 「ワンス イン マイ ライフ」

二宮英郷（東京都渋谷区）

#### 「ガラス」

森崎房枝（東京都杉並区）

### 奨励賞

#### 「名残りの月」

田島朝美（東京都日野市）

#### 「歳月」

丸山 史（大阪府八尾市）

#### 「緑のアリ」

吉野光久（神奈川県横浜市）

#### 「カナカナリンリンリン」

鈴木英夫（東京都小金井市）

#### 「ぬくい北風」

田宮佳代子（北海道上川郡）

### 佳作

#### 「源流」

小西九嶺（奈良県奈良市）

#### 「沖見茶屋」

佃 陽子（神奈川県横浜市）

#### 「轟音」

篠宮安紀子（東京都練馬区）

#### 「再会」

大重晴よし（静岡県浜松市）

#### 「星降る里にて」

犬丸らん（東京都練馬区）

#### 「予告」

相川柊子（千葉県千葉市）

#### 「戻り道」

足立 剛（兵庫県水上郡）

#### 「グランド・オダリスク」

松丘光一郎（東京都江東区）

#### 「君は終幕を前にして佇むか」

土田ひろし（静岡県沼津市）



力のある言葉

八覚正大



力のある言葉とは何か。  
最近、そればかり考えている。書き言葉に物理的重さはない。それは見られることによって初めて存在する。たとえ見られても読まれなければ紙に印字されたインクの染みに過ぎない。しかし、それが一旦読む側の脳に入ると人を感動させ、また落ち込んだ気持ちを腑活させ、時に身体さえも動かすような——そんな言葉とは何なのだろう。

かつて、文学（書き言葉）に人生を賭けた人々がいた。文学を至上のものと憧れ言葉の力を信じ、人間の真実・秘密を掘り出し書き出したいと実生活さえ犠牲にした者たち……しかし冷静に考えると、それらの行為さえ実は脳の活動という生理的な次元で捉えられることが分かってくる。心理学・精神医学・大脳生理学が進み、脳神経の機能・生理が解明されつつある昨今、人間の願望・欲望さえも、あらゆるレベルまでは科学的に解明されるようになってきた。

さらにパソコン・インターネットの進歩と普及により、あらゆる情報が膨大に増えている……そんな中で文学（書き言葉）の意味とは何なのだろうか……その復権を盲目的

に叫ぶのでもなく、至上なものと祭り上げそこにすがり安住するのでもなく……それでも「言葉」という人類が生み出した不可思議な「発明品」を、再びよりよく機能させ得たらと思う……。

さて、さすがに応募総数が五〇〇を超える、どうにか「言葉力」に出会い始めることができるようになった気がする。数はやはり質を高めるのだろうか。

当選作の「光のケーン」（藤原恵一）は、一言でいえば障害児を息子にもつてしまった父親の日常に寄り添った小説である。文が柔らかいというか、優しいというか、暖かいというか、なめらかというか……読みやすいのだ。それなりに裕福な家庭の息子ケーン（健一郎一八歳）は特別支援学校の高等部に通っている。主人公の父親は土曜日の午後、彼を養育施設へ車で送り迎えをする。その運転途中での「内的対象としての息子」との対話。いままで保護していた息子は年齢と共に発達（変化）していく。それを理解しようと父親はバックミラーに映る息子の顔を読もうとする。《ケーン、ケーン、何を言っているんだ、パパが知らないでも思ってたか？ パパはな、ケーンが考えてることなんか、ちゃんとわかっているんだ。ケーンがほんとうはどんな子か、ちゃんとわかっているんだ。そうなんだ、パパは、わかってたんだ。じゃ、僕の今一番つらい、ほんとうのほんとうの悩みって、なんだか、わかる？》……この独

白に近い父親の気持ちの投影は実は個体としての宿命を負った人間が、寄り添いという本能をどこまで伸ばせるかという一つの実験でもあるのだ。やがて個体としての父親が老い、息子は理解の枠から剥がれていくかもしれない。しかし「いま・ここ」においては極上の時間がある。《今ここに、ケーンとこうして過ごす時間、息を継いでいるわずかな空間。……ここには、妻の千冬もいない。……ケーンと二人だけいる高揚感、あれらの時間が持っていたものとはまるで性質が違う。自分の愛する子供といっしょにいる、というだけの幸福感とも違う。それ以外の、何かもつと大きくて豊かなものだ》と。大江健三郎と光君を連想しても構うまい。また出だしの古書店での情景の書き過ぎも指摘はできよう。さらに名前やタイトルの付け方にもっと推敲は可能だ。しかしそんなものは直せばいいのだ。この小説には、おそらく実体験を元にした、人間の関係を柔らかに深くさぐる「言葉の力」がたしかにある。

もう一つの当選作、「線路は続く」も秀作である。嫌なというか、その感覚を理解しがたい夫と何十年も連れ添った妻の思いがよく描かれている。世界は狭いのだが、ラスト、脳出血で倒れた夫を、見捨てないところがいい。《これが自分の役回りなのだ。世話をするものとされる者。どこまでいっても自分はされるほうにはまわれないのだ》という自己認識。そしてやがてくる「その先」を暗示させて

終わる。一段落させたい止め方ではある。ただ、その先を幾分なりとも（経験的に知ってしまった読者）には、動かされるような「言葉の力」までにはならなかった。「ぬくい北風」（田宮佳代子）——十八歳で十勝へ嫁いだ女性の一代記。生き生きとした会話文、また老婆の視点の

河林満賞の創設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品は銀華文学賞に応募される小説作品を対象にし、銀華文学賞選考委員によって銀華文学賞選考会において同時に選考され、御遺族の承認によって決定されます。

受賞者には賞状、賞品、記念品、賞金五万円が銀華文学賞授賞式で授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」

文芸思潮

暖かき。ここには人間の生命力のなんというか、大らかなホールディング作用（包み込み）がある。最後に、老婆が「母ちゃん母ちゃん眠いよ母ちゃん。わっしや、めんこい赤ん坊よ」と言って終わる。生と死の大らかな円環を見るようである。紙面の関係でこのくらいしか書けないが、この小説も「言葉の力」を十分に感じさせる作品である。評者としては、「光のケーン」に次いでこの作品に感動した。

以下印象に残る作品をコメントしたい。

「カナカナリンリンリン」(鈴木英夫)——亡くなった妻の位牌をリュックに入れて滝をめぐる男の話である。なぜ滝なのかという点が分からなかったが、主人公の内面で成仏していない妻への弔いの気持ち、しつとりと描けている秀作である。

「幻臭」(室町眞)——加齢臭への思いが、主人公の妻の側からよく描けている。自分の臭いへの認識をもつラストがなかなかいい。

「星降る里にて」(犬丸らん)——父が戦死し、若い母親は他家へ嫁いで行く。主人公を育ててくれた祖母との関わり。文体がみずみずしい。

「白い哀しみ」(前岡光明)——白血病になった息子の失踪。それを捜しに久しぶりに新宿を訪れた話。切実感があったが、どこか新宿の再紹介のような感が。

「戻り道」(足立剛)——少年の牛との関わりの話。描写

だしはなかなか読ませた。しかし昔の恋人の女医へのコンプレックス？ は話をぶれさせた。

「老舗奉公」(安田榮一郎)——江戸時代の商人の物語。時代物として分かりやすい。ただ、なぜ江戸時代という設定を必要とするのか、その作者の意図を伝えて欲しい。

「緑のアリ」(吉野光久)——オーストラリア駐在の特派員の、旅行にきた日本女性との情事。文が知性と情感をもっている。ただ回想からさらに何かを立ち上げてほしい気がした。

「湘南でのちょっとした出来事」(大崎長者丸)——久しぶりに会社を休んだ男性。不思議の国のアリス的展開？ しかし後半失速。

「名残の月」(田島朝美)——母を看取り家族を育てきった女性の話。苦労がよく描かれてはいる。

「沖見茶屋」(佃陽子)——戦時中、シンガポールで亡くなった愛する父の思い出。

「ガラス」(森崎房枝)——入院して思い出した原爆の記憶。重い内容ではある。

「グランド・オダリスク」(松丘光一郎)——五十歳になろうとする男の中学時代の憧れの美女との再会？ 男性の読者としては興味をそそられたが、なにか現在での展開がほしい気がした。

## 選評

今回は、さらに総数七〇〇くらいの応募になって、言葉

がみずみずしい。養子に出された子であったことに主人公は気付き驚く。が養父の元へやはり帰っていく。生活力のようなものの根っこに触れている気はするが、「言葉の力」になるまでには、もう少し構成などに工夫がほしかった。

「道標」(井上梨白)——アル中患者の実体験的な更生の話。この世界のことを素直に、なかなかよく描けている。

「轟音」(篠宮安紀子)——清書のアルバイトを始めた女性が、社長の戦後の引き上げの凄惨な話を聴いてしまう。なかなか大変な時代のことだが、そこからさらに心は癒されるのか——というテーマの展開を見たかった。

「君は終幕を前にして佇むか」(土田ひろし)——ガンになり自殺しようと思った男性が、負債を抱え自殺をしようとした男性と出会い、その偶然の出会いと関わりから互いに思いとどまってやり直そうとしていく話。頻発する現代の自殺の問題とも絡まって、テーマが読ませる。

「源流」(小西九嶺)——平家の落人の歴史をもつ村。自分の出自が分かっていく青年。文が分かりやすく知的。

「ワンス イン マイ ライフ」(二宮英郷)——常連の作者。筆力はかなりのもの。また性的なエネルギーを生命力の謳歌として用いる手法は、この作者ならでは。

「再会」(大重晴よし)——別れた妻が乳がん。その妻と和解する夫。娘がなかなかよく描けている。

「君は金比羅を見たか」(神月ふみや)——長崎被爆の出

の力をさらに広げてくれる作品が出てくるのを期待してしまふ。選評者を含めて、読者の脳は貪欲なのだ。

## 作品を選ぶことの怖さ

## 小浜清志



新しい裁判制度が今年から始まり、人が人を裁くことの怖さと、難しさなどが報道されているが、作品を選ぶという行為もまったく同じであると実感している。ある程度の実力があればほとんど横一線というのが作品選考の宿命ではなからうか。

私の編集担当をしていた方が、あるとき、文学賞の最終候補を選ぶときの苦悩をしみじみと語ってくれたことがあった。最後の最後までどっちにしようかと悩み抜き、いつそのこと鉛筆を転がして決めようかと本気で考えたこともあり、あれは神をも恐れぬ行為だったと述懐していた。やはり人が人を選ぶというのは非情であり、傲慢なのであるが、どこかで基準を設けなければならないという現実はずいぶん理解していただきたい。

当選作になった「線路は続く」であるが夫婦の息詰まる雰囲気や巧みな筆力で描かれている。いい作品にはつきものであるが、どうしてもないものねだりをしたくなる。この作品でいえば、作中ででてくる鎌倉などの風景を配置してくれたらもっと厚みが出たのではと、欲をつけ加えさせてもらおう。

さて、もう一方の当選作である「光のケーン」は特異な作品で、私としては前半の古本屋のエピソードがなければもろ手をあげて歓迎したい作品である。ケーンの日常と作者だけにしほりこめばもっと共感できたと思う。つまりは構成的に古本屋とケーンがうまく結びついているように見えるのである。これも前作同様なものねだりの、いい作品であるからである。それは優秀作の「ガラス」にも言えることで、あの原爆をなぜ回想にもつてきたのかと悔やまれる。現代と過去を行き来して作品の奥行きを広げようとしているが、あまり効果がでていないと思えない。

河林満賞の「白い哀しみ」の作者は何度か目を通しているが、今回の作品は過去の作品と比べると迷いがふっ切れたようにいきいきと展開している。私は当選作でもいいのではと思っていた。

私が最も高い点をつけたのは「緑のアリ」である。文句のない筆力に圧倒されたが他の選者の賛同を得られず奨励賞にとどまってしまったことが残念である。

西萩達之の古本屋からはじまり、なんだろうと読んでいくと、知的障害を持つ息子との話になる。選考会で、色々な欠点弱点の指摘があった。しかし、おそらく、それらはいした問題ではない。筋も結末も、殆ど関係のない小説があり、これがそれなのだ。僕は読みながら、奇をてらった変わった結末にならないように祈ったほどののだ。小説を終わらすためにだけ、結末がある。とにかく、不思議な小説である。当選作「線路は続く」(榎木啓子)は、総合点では最高得点であったが、少し、暗くはないかというのが僕の感想だった。選評を書く今、考えると、暴力ではないにしろDVの加害者である夫と、耐える妻。単に妻は自分名義の通帳をもっておくべきというような教訓なのだろうか、離婚はできなかったが、結末は小説的な解決策であるようだ。しかし、本当の暴力をふるう夫にたいしても最後に「ありがとう」といわれるとそれで終わりになるのだろうか、という思いは残る。

優秀作「道標」(井上梨白)は、読んだときから、優秀作以上という感じがあった。アルコール中毒の療養所の更正の話であるが、説明的すぎる、また、前に同じ題材で、他の作家が書いているもので、もっと凄い内容のものを読んだことがあるという指摘があった。僕は説明的な部分がそれほど気にならず、登場人物達もそれぞれ、うまく描かれていると考えたが、評価が割れたのは残念だった。

今回は選にもれたが「新宿の静かな夜」のもつ魅力に次回を期待している。しっかりと作品姿勢のある方で、テーマさえしつかりと整えば傑作が書けるであろう。

全体的に言えることであるが、もう少し自分の作品を大事にするためには是非推敲をお願いしたい。ちなみに私は最低五〇回位の見直しをしないと世に出す自信がもてない。作品は一度手元を離れてしまえばもう戻らない。であるなら、この化粧でいいのかこの服でいいのかと悩み手直しをするのは当然のことだと思う。

## 題材にふさわしい文体、書き方

### 大高雅博



下読みから選考をおこなっていると、今回は上下の差が大きかったような感じがある。ただ、これも今回の作品を比較したことによるもので、次期作品では逆転するかもしれない。小説とは本来そういうものなので是非、精進をお願いしたい。

当選作「光のケーン」(藤原恵一)は不思議な作品である。

優秀作「ガラス」(森崎房枝)は原爆の話であるが、現在の病院に入院している主人公と、同室の意地悪な患者というような設定ではじまる。そこから、原爆の話になるわけだが、ストレートな原爆の話よりも効果的である感じがする。この作者にはもっと良い作品があったという他の選者の意見もあり、優秀賞となった。

優秀作「幻臭」(室町眞)は、臭いと、老いをからめたもので、着想が良かった。ただ、僕には結末が、その構想ではなく、文章の問題だと思いが、ちょっと弱い感じがした。河林満賞を受賞した「白い哀しみ」(前岡光明)は、完治が難しい病気にかかった息子が家出をし、彼を捜しに昔住んでいた新宿を訪れるという作品で、題材のこともあり、緊張感があった。骨髄移植が広まらない等のかかなり深刻な問題を背景にしながら、後味がよい作品に仕上がっている。優秀作「ワンス イン マイ ライフ」(二宮英郷)はいつものように彼らしい力のある作品である。今回は、姪の学費をどう工面するか、又、女優志望の高校生に生活のために鍼灸のような学校へいくことを進めるなど、今までにはないひねりのようなものがあり、興味深い。

以上のように見ていくと、かなりの力作が集まってきたことが分かる。他にも何作か興味深い作品があった。

奨励賞「歳月」(丸山史)は別れた夫との再会の話だが、緊張感のある文章で、面白く読んだ。

奨励賞の「名残りの月」(田島朝美)は、何作か読んだ彼女の作品のなかでは、一番優れていると思う。ツバメの巣立ちと、家族が離れていくのを対比させて書かれている。おそらくこの題材で書けるのはこの一作だけだと思う。ただ、文体というか文章というか、最初の部分でセンテンスの長い文があり、それほど効果的とは思えなかったが、それで貫く方法もあった。後半の短いセンテンスのほうがテンポも良く読みやすいのであるが。全体に文章は練った方が良い感じがする。それはともかく、ある題材にはそれにふさわしい文体、書き方がある。というか、それしか書けないやり方があると思う。一度きりの題材ということが、読み手に伝わるものなのだ。考えてみれば、そういう作品が今回は多かったようだ。まず、そういう題材を見つけることが必要なのだ。それはおそらく比較的身近にあるものなのだ。

何度も奨励賞以上の作品を書いている人もおられるが、二度三度となると、それなりの成長がないと評価は厳しくなる。驕ることなく何が足りないかを考えていただきたい。次作を期待している。

せなかつたものの、手を入れてもらって、その世界を再認識した。文章の質はいい。技量をさらに磨き、この作品で書き足りないところを次の作品でさらに書いていってほしい。

河林満賞となった「白い哀しみ」(前岡光明)は、白血病になった息子が新宿へ家出するあとを追って自らの青春時代を振り返りつつ、街を捜し歩く父親の物語で、残された短い命に触れ合う親子の感情がよく書けていて、河林賞にふさわしかった。

今回はこうした過去に賞を得た書き手の奮起が目立ち、楡木啓子氏やこの前岡光明氏をはじめ「幻臭」の室町眞氏、「ワンス イン マイ ライフ」の二宮英郷氏、「ガラス」の森崎房枝氏、また「歳月」の丸山史氏、「名残りの月」の田島朝美氏、「カナカナリンリンリン」の鈴木英夫氏は、おなじみの顔である。再受賞は、当然ながら前よりもよい作品が要求される。受賞した作品以上のものを書くのは、むずかしい。一度、二度、あるいは三度と、受賞作より落ちる作品を書いても、それに屈せず持続してさらに自分自身に挑戦し乗り越える不屈の努力と前向きな姿勢があつてはじめて、前以上の作品に結実する。その意味では、再度受賞したこれらの書き手には、一つのハードルを乗り越えた大きな成果として心から拍手を送りたい。

## 選評

「道標」(井上梨白)は、アルコール依存症患者の病院治

## 再受賞の輝き

## 五十嵐 勉



第六回の銀華文学賞は、突出したものはなく、代わりに応募を重ねた書き手の活躍が目立った。

当選作「線路は続く」の楡木啓子氏は、これまで優秀賞・奨励賞にもなっている安定した技量の持ち主だが、今回は一段と作品の出来がよく、ほとんどの選考委員が高点をつけた。世間知らずの大学教授の夫を最後まで面倒を見ようという覚悟に至るストーリーの運びは流れもよく書けていて、技量の向上がはっきり感じられる。タイトルがもう一つの印象だが、予備選考トップで上ってきた経過は肯定でき、まとまりのよさは抜きん出ていた。これをきっかけにさらに優れた作品を期待したい。

同じく当選作、藤原恵一氏の「光のケーン」は、知能に障害のある我が子を学校に送迎する父親の世界を描いたものである。私としては父親からの視点だけしかないのは不満で、少しでも母親の立場を入れてほしかったのと、最初の本屋の部分が長すぎるなど細かい点においても、表現にしっかり手が届いていない恨みがあったので、当初は推

療の回復と社会復帰の状況をレポート風に書いた作品だが、素材としては最も興味深い内容で、それだけでも価値があると思った。状況記録以上のものがほしいという他の選考委員からの注文もあったが、私としては、この世界を知らない人にはこれだけでも読む価値があると判断した。変わった材料、新鮮な素材は、小説の大きな魅力の一つである。無条件に引き込まれる世界は、物語の源泉を備えている。この「道標」は登場人物一人一人がおもしろく、現実の体験の重さを備えていた。

特異な体験としては、森崎房枝氏の「ガラス」は、放射能汚染されたガラスの破片の話だが、原爆の爆発力によって割れたガラス破片のすさまじさがわかるとともに、汚染ガラスの力は、流血をさせない不思議な作用があり、それがいっそう不気味さを誘って、原爆の奇妙な側面を垣間見させてくれた。原爆のガラス破片についての小説は初めて読んだが、こうした知られないことは、丹念に拾っていくばまだまだありそうである。後世に残すべき記録の発掘のために、この銀華文学賞にさらに期待したい。

銀華文学賞は、四五歳以上という枠を設けてあり、テーマも普通からすると熟年以上の問題と限られてくるのではないか、という懸念もある。枠を取ってしまったらどうかという提案も寄せられている。しかし、現在の所、大手出版社の文芸誌などが、若手中心の新人賞に選考も偏ってい

るといふ批判に立つての賞なので、この立場を貫きたい。テーマが老年の問題とか、限られてくるのではないかといふ批判については、熟年・老年でなければ見えてこない人生の問題は、もっと多様で、もっと領域が広いものだと思う。その点では、今回の作品のほとんどは、常識的な領域にとどまっていたと振り返る。もっと積極的な姿勢を持ち、新しい見方で照射していけば、積み重ねてきた人生の時間そのものの中に、新鮮な、深い意味を蔵した無限の領域が開かれていると思う。そういう意味で、熟年・老年という考え方に縛られず、果敢に発見し、新しいものを創造していく、意欲に満ちた作品が登場してくることを期待したい。真の新鮮さとは、その挑戦のエネルギの中こそ、本来の輝きを放って現れてくるものだろう。

## 生き方に響くもの

### 小沢美智恵

今年も五二六編というたくさんの応募があり、人生の機微にふれたさまざまな作品に出会った。



もの、「至上の世界だと感じ、ケーンこそが自分の光である」と気づくのである。

文学とは、ある状況における人間の幸福と不幸を描くものだともいえるが、この作品はそれらを透明な水の底に沈め、わずかな光によってその存在を浮かびあがらせるような「抑制」に満ちている。静かな語り口でありながら、重く読者の肚の底に届き、わたしたちの人生や人間の生き方に深く響いてくるのである。

もうひとつの受賞作、楡木啓子の「線路は続く」は、世間的には何の不足もないと思える夫に永年仕えてきた妻が、小児的性格の夫に家政婦扱いされることに堪忍袋の緒を切らし、家出して離婚を考えるものの、結局夫を見捨てることができず思いとどまる話である。荷物を取りに戻った妻は、夫が風邪で寝込んでいるのを見て、「武士の情け」と世話をするのだが、夫は意固地になって用意した食事も取らない。妻が「謝るつもりも、やり直すつもりもない。自分は離婚しようと思った」と大声を出してはじめて、夫は妻が本気であることに気づき、用意された好物のカレーを食べて、感謝の言葉を口にする。その夜夫は脳幹出血を起し、介護の必要な体になってしまふのだが、妻は三十年かかってやっと聞くことができた夫の「ありがとう」のひとつに救われ、自分の名前を書き込んだ離婚届けを破り捨て、いつまで続くかわからない結婚生活を歩み続ける

受賞作の藤原恵一「光のケーン」は、知的障害のある一人息子を持つ父親が子どもとのふれあいを通して至福の時を得る話である。古本屋を訪ねるきわめて日常的な場面からはじまるこの小説は、なぜ父親・良平が毎週この場所を訪れるのか、その理由から語り起こして、十八歳になる息子・ケーンとの生活を描いていく。息子の障害の状態はつきりしたときから、会社が終わるとまっすぐ家に帰り、妻任せにせずに自ら世話をしてきた良平は、「友人たちと時間に気兼ねなく普通に会い、あちらこちらへと身軽に旅行を楽しみ、居酒屋を夜遅くまで飲みまわっていたころのこと」をずいぶん遠い世界の出来事のように思う。車が好きで高級車への夢を膨らませていた時期もあるが、「今ではもう一生ケーンのために金が湯水のようにかかることがわかっているから、そんなものに興味を持つことはない」。しかし「明るいもの、華やかなものは、何一つない。今の瞬間もないし、これから先も、もうずっとない」と思える暮らしのなかで、面倒に思えた息子の世話はだんだん面白くなり、生活の一部になって、「自分はケーンをこういうふうにして世話をしながら一生過ごしていくために生まれてきたのだ」と考えるようになる。そして障害児のための療育施設に送迎する車の中のケーンと二人だけの世界を、「自分の愛する子供といっしょにいる、というだけの幸福感とも違う。それ以外の、何かもっと大きくて豊かな

決心をするのである。

ありふれた話といえはいるが、夫の性格や妻の思いがよく書けていて人物像がくつきりと浮かび上がる。また別れを決意し、断念するその流れも自然で無理がない。自転車で倒れたところを助けてくれた男性に思わず体を強く寄せたくなったり、三十年の結婚生活ではじめて聞いた夫の感謝の言葉を何度も胸の内でも繰り返してしまふエピソードなど、底知れない妻の寂しさをよく伝えている。

ただ、そこには既成の価値をこわして世界をふたたび作り上げるといふ新しい価値を創造する要素はない。常識的な世界や慣習的な小説様式といった決められた枠の中で、さまざまなものをうまく組み合わせた作品といえるだろう。わたしはその点が少し気になったが、純文学ばかりが文学ではないし、芸術的価値に重きを置く小説ばかりが小説ではない。「銀華文学賞」はあらゆるジャンルの小説に門戸を開いているということもあり、受賞には賛成した。よくできた通俗小説は広く読者に受け入れられるだろう。実際、わたしも一女性として主人公の妻に共感を覚えたのである。優秀賞の二宮英郷「ワンスインマイライフ」は、六十六歳の英語教師と高校生の教え子の恋愛を含む交流を描いた作品だが、いやらしいところの少しもない力強い小説である。兩人とも生きることに向きで、生命力にあふれており、躍動的な文体と相まって生への賛歌になり得ている。

ところどころに詩的な文章がはさまれて、それがびたりと決まったときは魅力だが、時に飛躍しすぎてわかりにくいところがあるのが惜しまれた。

以上三作を今回わたしは強く推したが、完成度という点では他にもすぐれた作品がたくさんあった。けれども最終的に選ばなかったのは、それらがわたしの胸に響いてはこなかったからだ。作品との相性というものもあるだろうが、小手先の技術では真に人を揺り動かせないということだろう。全存在といっては大げさだが、全体重がかかっているかどうかは作品に如実にあらわれるように思う。

他に印象に残った作品をいくつかあげる。

室町眞「幻臭」は、姑の死が引き起こした心の疲れが匂いと結びついた点がおもしろかった。

平塚司「時は流れる？」は、退職し、自分と出会う話で興味深かった。

篠宮安紀「轟音」は、北朝鮮からの引き揚げ体験のすさまじさを読者に想像させる手法で描いて力があつた。

その他、大島直次「時の余白」、大重晴よし「再会」、黒木一於「隠棲者の館」、神月ふみや「君は金比羅を見たか」、坂上弘之「メジロ色の季節」、相川柊子「予告」、岡野弘樹「母の王朝絵巻」、佃陽子「沖見茶屋」、吉野光久「緑のアリ」、前岡光明「白い哀しみ」、松丘光一郎「グランド・オタリスク」、森崎房枝「ガラス」など、それぞれに魅力があつた。

## 文芸思潮銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞 授賞式&祝賀会・懇親新年会

読者の皆様、今年も文芸思潮 銀華文学賞・エッセイ賞・現代詩賞の授賞式および祝賀会・新年懇親会を次のように開催いたします。

どなたでも参加できます。楽しい文学の集いしたいと思います。どうぞお気軽にご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

日時 ●平成二十二年一月三十一日(日)

授賞式午後二時より／祝賀会・新年懇親会六時より

会場 ●大田区民プラザ・小ホール

(東京都大田区「下丸子」駅前)

※JR「蒲田」駅より多摩川線乗り換え三つ目「下丸子」駅前または東横線「多摩川」駅乗り換え三つ目

会費・飲食費 ●五千円

問合せ・予約申込 ●アジア文化社・文芸思潮

電話 ●三・五七〇六・七八四七 池田・五十嵐まで  
または 080-8171-9771 まで



選考会風景

第2回蓮如賞優秀作

小沢美智恵

## 嘆きよ、僕をつらぬけ

「夏の花」の著者・原民喜の、45歳で自ら世を去るまでの、苦悩に満ちた、しかし一筋につらぬかれた清冽な生涯を、精緻な作品解説と深い共感を通して甦らせる感動の評伝傑作!

発行所 河出書房新社 定価 1300円

## 第7回 銀華文学賞 作品募集

銀華文学賞は、人生経験豊かな壮年・熟年・シルバー世代の文芸創作活動に光を当て、その小説作品を賞揚し、文学創作エネルギーを顕彰するものです。また埋もれた才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、広く社会に知らしめ、真に価値ある作品を世に残すことによって、日本文学の興隆に寄与することを目的とします。

今年もどうぞ奮って銀華文学賞にご応募ください。作品をお待ちしています。

### ●●募集要項

**募集内容** ●オリジナルの短編小説作品。これまで同人雑誌などに発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る(複数応募者は失格とする)。

**応募資格** ●2010年6月30日現在において45歳以上の者

### 応募規定

400字詰原稿用紙50枚以内(20枚くらいのもので可/原稿用紙使用の場合は必ずA4の原稿用紙を使用のこと)。ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を綴ること。応募原稿は返却しないので、必ずコピーを取って応募のこと(コピーを応募するのが望ましい)。※今年度より応募審査が1000円かかります。

別紙に①タイトル②本名およびペンネーム③年齢・生年月日(年齢・生年月日のないものは失格とする)④〒(ないものは失格)・住所⑤電話番号⑥職業・略歴⑦400字詰換算原稿枚数を記したものを添付。⑧応募部門(2010第7回銀華文学賞応募作品と明記のこと)⑨応募審査料1000円を郵便為替で同封。外国からは11USドル。応募者には結果を通知し、希望者は作品をインターネット・ホームページに掲載する。

**応募先** ●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

文芸思潮「銀華文学賞」係

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

**賞** ●銀華文学賞 ■賞状・トロフィー・賞金20万円(受賞者複数2名の場合は10万円、3名の場合は7万円)

河林満賞 ■賞状・トロフィー・賞金5万円

優秀賞 ■賞状・賞メダル・賞金3万円(数名)

奨励賞 ■賞状・賞メダル

**選考委員** ●作家集団「塊」メンバー

**締切** ●2010年6月30日(当日消印有効)

**発表** ●予選通過者は2010年11月末発売の「文芸思潮」38号に発表する。受賞作は2011年1月末発売の「文芸思潮」39号に発表掲載。優秀作・奨励賞など優れた作品も順次「文芸思潮」およびインターネットに掲載する。

**主催** ●アジア文化社

※主催者から

真摯な文学創作に打ち込んでいる人々に光を当てたい。強烈な体験、斬新で強靱な視線、震えるような共感、心に迫る文章、魂を打つ言葉を期待しています。熟年世代・シルバー世代の底力を見せてください。

※今回より恐縮ですが応募審査料1000円を御協力くださいますようお願い申し上げます。

## 銀華文学賞選考委員プロフィール

### 小沢美智恵

おざわ みちえ

1954茨城県生まれ

千葉大文学部卒

出版社勤務

93「妹たち」で川又新人賞受賞

95評伝「嘆きよ、僕をつらぬけ」で蓮如賞優秀作

06「冬の陽」で千葉文学賞受賞

日本ペンクラブ会員

### 大高雅博

おおたか まさひろ

1954石川県生まれ

日大国文学科卒

80「旅する前に」群像新人長編小説賞受賞

他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥー・リメンバー」など

### 小浜清志

こはま きよし

1950沖縄県西表島隣の由布島に生まれる

69県立八重山高校卒業と同時に上京

劇団四季、沖縄海洋博などで、舞台裏方を務める。その後も様々な職を遍歴

87作家中上健次と知り合い、師事。マネージャーを務める

88「風の河」で第66回文学界新人賞受賞

「消える島」、「後生橋」で芥川賞候補  
小説集『火の闇』(集英社)

### 八覚正大

はっかく まさひろ

1952東京生まれ

早大理工学部数学科・都立大仏文科卒  
教師・精神対話士

92「十二階」で新潮新人賞受賞

小説「零度の遊び」「イエロークラスター」  
「父のフレーム」「カウンター」ヤルポ『夜光の時計』など

教育と文学、心理学、精神分析を幅広くつなぎながら文学活動を展開

### 五十嵐勉

いがらし つとむ

1949年山梨県生まれ

早大文芸科卒

79『流論の島』で群像新人長編小説賞受賞

84-90タイ在住、カンボジア問題を取材しながら東南アジアを遍歴

「東南アジア通信」「アジアウェーブ」を創刊、編集長

主著に『緑の手紙』(読売新聞インターネット文芸新人賞)・『鉄の光』(健友館文学賞) 他の小説作品に「ノンチャン、NONGCHAN」、またルポ『微笑みの国タイ』などがある。

### 作家集団「塊」メンバー募集

作家集団「塊」は、文芸思潮および銀華文学賞・まほろば賞などを通じて、新たな表現運動を展開する作家集団です。

河林満の逝去により、欠員が出ましたので、新メンバーを募集します。

「文学界」「群像」「新潮」「すばる」など新人賞またはそれに準ずる受賞経験者で、現在の文学状況を打破したい気鋭の作家の参加を期待しています。

参加を希望の方は「文芸思潮」内・作家集団「塊」事務局に御連絡下さい。地方の作家でも、参加可能です。また受賞歴がなくても「塊」準メンバーとして参加できます。作品・自己紹介文などを送ってください。

連絡先 TEL

03・5706・7847  
090・8171・9771

五十嵐まで